

國學院大學学術情報リポジトリ

談話室 サロン文化への郷愁

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩瀬, 由佳, lwase, Yuka メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000174

サロン文化への郷愁

岩瀬由佳

サロン——ヨーロッパ、特にフランスで、上流社会の夫人が自宅の客間に名士を招いて開いた社交的な集まり。ここで芸術・学問・政治などが論じられた。一般に芸術家・学者などの社交的な集まりの意でも使う。(明鏡国語辞典より)

本学に英語担当教員として着任する前に在籍・在職したどの大学でも、教員や学生が集えるアカデミックな共同スペースが必ずあった。母校の旧大阪外国語大学では、個人研究室の他に語科ごとの共同研究室があり、共用する図書や大画面のAV機器が置かれ、教員や学生がたびたび集まっていた。また、留学先の1つ、ロンドン大学SOASでは学科ごとのライブラリがあり、ここで自習していると、話し相手を求めて来た先生が目の前に立っていた、ということがあった。しかし、いずれも、いつでもふらりと入ってきてもそこにいる教員と雑談し、あるいは研究上の疑問について話し合い、時にはパンとチーズを肴にワインを楽しむ、という場所ではなかった。

14年前に國學院大學文学部外国語研究室に英語専任教員として着任した当時、専任の研究室は、当時の図書館(今の3号館あたり)の上にあったが、今のような個人研究室ではなかった。3人の資料室員のいる事務スペースを通り抜けると、大きな共同の研究室(写真)があり、入り口から見て手前はくつろげるソファのあるスペース、奥は大きな机のある、いわば作業スペースだった。さらに、図書資料中心の研究室やPC部屋(通称「老人部屋」)など小さな研究室がいくつもあり、いずれも共同で使っていた。

着任当初、私物をロッカーに入れるしかなかったのは不便に感じたが、「語研」研究室の存在意義は、そのような個人の居住性を越えたところにあった。

個人の資料を置く場所は少ないが、そこには常に誰かしら、文字通りの生き字引がいた。空き時間には、誰かが思いついた「謎」を解くべく、資料室内に山ほどある資料を手分けして片端から調べたり、たまたまその場に居合わせた運の悪い学者を捕まえたり。インターネットで検索することでは体験できない興奮があった。

このように、語研はサロンだった。丸谷才一氏や種村季弘氏と語研サロンで会話を楽しんだ人が今どれほど在職して



いるかわからないが、そんな時代は終わってしまった。かしこまって個人研究室に伺うのも悪くないが、サロンの持つ偶然性という楽しみは味わえない。

また、サロンに集う人々を「先生」と呼ぶのは誠にそぐわない。着任したばかりのころ、語研の習慣を知らずに、同僚に「○○先生」と呼びかけ、「僕は君の先生じゃない、ここではさん付けて呼ぶんですよ」と窘められたことがある。同僚を「さん」で呼ぶ伝統は、今も生きている。

語研の研究室は、単に所属の専任教員が集まる場所であるだけでなく、外国語担当の兼任講師はもちろん、他学科、他学部の教員との交流の場でもあった。今でも、語研で知り合った人と学内で会うと、あの場所を共有していたという、独特の懐かしさを感じることもある。あるとき、ドイツ語担当の兼任の先生に、ドイツのプレッツェルを食べてみたいとか何とか言ったのだと思うが、次の週にその先生が自宅近くのパン屋でプレッツェルを買ってきてくださったのに感動した。また、これが大変美味しかった。現在、同じ外国語担当であっても、兼任講師と接する機会は、教員打

合会を除けば、ほとんどない。

広い語研は、会議室としても使用した。水曜日の夜は決まって、会議の後まず語研でワイン、その後どこかの蕎麦屋か居酒屋に再集合してよく飲んだ。おかげで、少なくとも私は、会議の後には飲むものである、と体が覚えてしまっている。「研究室で飲む」ことに驚く人もいるが、私は学部時代からそんなところにはかりいたので、ごく当たり前のこととして受け入れた。研究室にビールが常時保存されているのも常識だ。着任当初と現在とでは、私個人に限っても環境は大きく変わった。まさか、自分の所属や居場所まで変わるとは、私個人に予想もしなかった。語研と外文を合わせて30名ほどの専任教員も、今は外文のみで20名を切った。月に何度か学科会議でほとんどの同僚と顔を合わせるとは言え、もはやあのサロンはどこにも存在しない。

広々とした語研の研究室は、単なる部屋、居場所としての空間では決してなかった。（単なる飲み部屋でもなかったが！）そこには、自分の殻に閉じこもっているのは決して出てこない発想があった。学問や教養は、そうした空間での交流で深まるのではなかっただろうか。

窓から見えるヒマラヤ彩、文字通り風通しのよい空間、尽きない話題と美味しいお酒を楽しむサロン。これが、私にとつての語研だった。

（なんでイワセ）ときがこんなことを書いているのか、という罵声が聞こえそうだが、まだ誰も書いていなかったのだから仕方ない！）

* この研究室は、平成18年6月にその役目を終えた。

（説話文学）